

「十三歳になって思うこと」のなかに、『十三歳で結婚したい』とと思っている女の子」が周囲にいると書かれていて、びっくりしました。将来への不安を感じていて、今の生活をそのまま続けたい、という意味での「結婚したい」です。そのことを三谷さんが率直に書いてくれたおかげで、結婚や、家事、仕事、といったもののとらえ方、定義は、その国の文化によってこんなにも変わるのだとはじめて考えさせられました。

「正義の味方になりたい」を書いた門田さんは、『国を作るという仕事』という本を読み返し、自分の知りたいことについて掘り下げて考えています。そして自分なりの答えを見つけます。ここで作者が読み、考え、「これだ!」と思ったことは、この先、作者の生きていく上での指針になると思う。とてもたのもしい感想文でした。

「知ること、伝えること、共感すること」を書いた近藤さんは、読書に加えて自身の経験も鑑みて、自分にもできることを具体的に考えます。知ること、伝えること、それだけではなく、「共感する」ことの大切さに気づきます。共感が大事であると、私もこの文章に気づかされました。近藤さんが経験から得た未来の夢を、私も応援したいです。

山下さんの「右ならえせぬ勇氣」は深い考察をととてもわかりやすく書いてくれた文章です。できる、できない、あるいは得意、不得意、興味の有る無しは、その人の「個性」であるという考えはとてもすばらしいと思います。

渡邊さんの「日本に生まれたからできること」では、「私は女の子だから」という言葉を、ポジティブにとらえられないかと提案しています。私も、プランのこの標語を見聞きするたびに、「女の子だから」に続くのは、本来はいい意味の言葉であるべきなのに、とっていたので、読んでいて、渡邊さんの言葉にととても共感を覚えました。

「籠の中の鳥」で書かれていることに、私は深く感じ入りました。男の子も女の子も、それぞれ違う、間違った価値観の籠の中にいると、村上さんは書きます。でも、どんなに頑丈で精巧な籠でも、鳥が賢ければ、籠から出ることができるはずだという言葉には感動しました。だから私たち、また、だれしものが、賢くならなければならない。学ばなければならない。とても説得力のある感想文でした。

この感想文コンクールの課題図書は、すべて、読んでいてたのしい気持ちになれるものではありません。それをあえて読んでくださったことに感謝します。みなさんの書かれた言葉に、私もはっとさせられたり、あらためて考えさせられたり、気づかなかったことを教えてもらっています。ひと夏の、あまり愉快ではない読書体験を、ぜひこの先もずっと覚えていてほしいと思います。

門田光世